

---

# 山神少女+

ヒトエビト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

山神少女+

### 【コード】

N0337X

### 【作者名】

コトエビト

### 【あらすじ】

「山神少女」本編以外の作品（頂き物イラストやweb拍手小話など）を置いています。

## 画廊

ここは頂いたイラストやCGを置いております。

閲覧される際に

?自分のイメージを大切にしたい!

?イラスト全般が苦手だ!

?これこれこういう絵柄じゃないとやだ! e t c …

という方は、ここでひとまず二、三步バックステップした後に華麗にターンをしていただきますようお願いいたします。ムーソウオークも可です。

なおイラストを描いてくださる心優しい方を作者はこれでもかというほどお待ちしております。

随時募集中です。近くのコンビニに足を運ぶかのごとき気軽さで  
ご一報ください。

それでは頂いた順番にご紹介していきます。

ごんたろう 様

エコーと天邪鬼

> i 2 5 3 2 5 — 2 0 8 4 <

優しい淡い色使いがほのぼのとした雰囲気をかもしだしていますね。  
甚平姿がヒトエビトのイメージとぴったりでした！  
ちよつと首を傾げてるエコーがまた愛らしいことこの上ないです。  
天邪鬼の表情も、彼の性格がすごく出ています。

3

もふもふ 様

もふもふ様からは計2枚頂いております。ありがとうございます！！

天邪鬼とエコー（幽谷響）で天幽少年！

> i 2 7 1 8 7 — 3 3 8 6 <

背景の花や模様的美しさ、神社（ボロくない！）の荘厳な佇まいに見る度うっとりしてしまいます。  
個人的に嬉しかったポイントはエコーの紅葉です。拍手小ネタまで取り入れる細やかさに脱帽しました！

猫又 New！（12/15）

> i37208 — 3386 <

絶句してしまうハイセンス。気が付いたら口を開けて見ていました。上品なのに茶目っ気も感じる表情にうおお。そして背景が何気に天気記号おお！（左から順に雪、風、晴、曇、雨）  
華やいだ色使いがまた素晴らしくてほれぼれと見蕩れてしまいます。

Lizreel 様

山の主こと御大（人型バージョン！）

> i31529 — 2496 <

圧巻の一言の贅沢な3DCG。あわわなんと見目麗しい御大でしょう。まじまじと観察しても顔に毛穴ひとつ見つけられませんよ奥さん！狐火まで出してる御大、臨戦態勢ばっちりです。作者はもう完全降伏ならぬ完全幸福。ありがたやありがたや。あとヒトエビトはLizreelさんの小説のファンです。

## 品 様

品様からはなんと計7枚も頂いております！  
本当にありがとうございます。ヒトエビトは果報者です。

## 猫又

> i 3 2 4 6 7 — 4 1 1 2 <

あわわわなんと上品な猫又でしょう。耳が！ 尻尾が！ 見返り美人っ！

こう……二本の尻尾をたしたしと揺らしつつ「あきまへん」とか何とか、はんなり諭して欲しくなりますね。あと顔の三色配分が素晴らしいくて大っ変満足でしたー！

## (ごどめき) 百々目鬼

> i 3 3 8 9 4 — 4 1 1 2 <

なんと描き直しまでしてくださった一枚です。個人的に前の太ももに目がいつてしまう百々目鬼も好きでしたが。あと描き直されたことにしばらく気が付いてませんでした。気付いた時の驚きといったら……。

腕の目の異様さとスタイルが素晴らしいです。黙って立っているだけでもおどろおどろしくて素敵です。オプションの小鳥さんがこれまた愛らしくて絶句……！

牛鬼うしおに

> i 3 2 7 7 8 — 4 1 1 2 <

マッチョ！ マッチョ！ 見るからに強そうな立派な体躯、手には酒瓶と盃。こういうラベルの日本酒か焼酎が売っていきそうな気がしてなりません。あつたら即買います。  
牛鬼の右下あたりをよーくご覧下さい。ほら、恐怖におののく主人公がいるはずです。さあ心の目で見てください！

エコー（口笛練習中）と天邪鬼（朔月嘲笑中）

> i 3 2 8 7 8 — 4 1 1 2 <

口笛の音や笑い声が今にも聞こえてきそうです。天邪鬼が生き生きして良い表情してますね。  
そして心の目で見ましたところ、真ん中辺りに確かに彼女がおります！ よくご覧頂きたい。おわかりいただけただろうか？

では心の目で見えなかった人向けに……

どーん。これが透明主人公です！！

> i 3 2 3 7 2 — 4 1 1 2 <

作中、外見描写が巫女装束以外ほとんどない（あえてですが）にも関わらず、こんなにめんこく描いて頂きました。そつと膝を抱えた姿が彼女の孤独を象徴しているかのようです。凜とした表情にも寂しげな表情にも見えますね。  
筆で書いたようなロゴがすごく好みです。

### クラト（久礼刀）

> i 3 5 7 8 7 — 4 1 1 2 <

タイトルとポーズだけで何話のどの話か瞬時に分かりました。イ、イケメンだ！！ これはニーナが惚れるのも分かりますねー。墨っぽい線が和風な感じでとても良いなあと思いました。表情にクラトらしさがあつて「おお」と嬉しくなりました。

### 鴉天狗

> i 3 5 8 0 6 — 4 1 1 2 <

第6話5の鴉天狗が太刀を構えているポーズ。これが更新前に描かれていたというのが驚きです。完全にヒトエビトの脳内は把握されています。目つきが悪くて素敵です。  
しかしつ、何よりも下駄の鼻緒がポイントです！ 特別仕様ー！  
細やかなお心遣いに感服です。



ニーナ・フィカス New!

> i 3 6 3 2 5 — 4 1 1 2 <

髪の毛をくしゃっとされてむくれているニーナ（第4話5）の図。  
美人……！！ 吸い込まれそうな緑の瞳。スタイルも抜群。これは  
クラトが惚れるのも分かりますねー。でかい薬籠とベルトにナイフ  
という出で立ちなのに、彼女の上品さがにじみ出ています。

素晴らしいイラストを描いて下さった方々本当にありがとうございます！  
届け感謝ビーム！

じつつくりと網膜に焼き付け、PCの液晶に穴が開く勢いで執拗  
なほど舐めるように眺めております。

「描いてみようかな」「描きたいな」「描いてやるよ」「もう描  
けたよ」「カッとなって描いた」「おっと手がすべったあ！」「……  
」などなど。

ヒトエビトはいつも何度でもお待ちしております！ ばっち来いで  
す！ むしろ行きます！ ぜひともご連絡下さいませー。

おまけ

> i 3 5 9 5 9 — 2 3 5 1 <

Web拍手に数ヶ月間放置していた鴉天狗です。見辛いこと山の如  
し。

## web拍手小話まとめー(前書き)

web拍手内に掲載していた小ネタや小話をまとめたもの。加筆修正あり。

しょうもないものから本編の裏側に迫るもの、作者のつぶやきなど。

## Web拍手小話まとめ

### 【第5話5 おまけ(その後)】

「まままま、待って下さい！ 冷静になりましょう、私男じゃないですから……ってホントにどこ触ってるんですか！？ ひゃあっ」

『手探り、というのもまた楽しい戯れでありんす おや危ない』

「はあはあ……エ、エコー！！ ゲツジヨブありがとう！！（い、今のうちに距離取ろう。うおお襦袢脱がされなくて良かったよー）」

『ちっ、ほんに無粋な子でありんすねえ』

『あ、あ！？ もう終わりかよ！ 好い悲鳴が聞けると思ったのによお。つまんねえなあおい』

『……驚いたな。あの虚が戒めの縛を破り、自ら動くとは。昨夜も目を疑ったが』

『ああ、天邪鬼はんを放り投げはったあれどすな。ふふふ、おもしろいことお。百々目鬼はんでも「目」えを疑うことがあるんどすなあ』

『幽谷響や。わっちと戯れるにや、お前はまだ早うありんすえ？』

『どっから喋ってんだテメーはよ』

「ど、どうやって天井に張り付いてるんだらう……女郎蜘蛛だからかな」

『嘆。話が露ほども進まん、鴉のよ』

『御意』

### 【クラトとニーナ】

「おい、起きろニーナ。お前なんでいつつも寝起きだけ悪いんだよ」

「すやすや」

「おい、そんなんで一人旅は大丈夫だったのか？ 無用心過ぎんじやねえか」

「すやや」

「二一ナ。起きろ」

「すうすう」

「いい加減起きねえんなら」

「むにゃ？ あ、お早うございます。クラトさん」

「……………ちっ」

「な、なんで挨拶ただけで舌打ちするんですか!？」

「……………いや、身の危険は本能的に察知できるのか。安心した」

「一体何の話ですか!？」

### 【天邪鬼とエコー】

『なあ音の聞いてよ。僕さあ、こないだお前の真似してサクツキサマに近づいたんだけど。これがぜんっぜんバレなくってさ、すっごく面白かった』

『……………』

『でさ、バレないついでに後ろから抱きついてやったんだ。逃げられないようにね。で、そのまま喉を引き裂こうか絞め殺そうか迷ってたら、運悪く御大がいらっしやってさ。結局何も出来ずじまいだよ。あーあすっごく残念』

『……………』

『でさ。あいつ僕に何したと思う？ 笑い声上げながら僕の髪ぐっしやくしゃに掻き回してきたんだよ。ホント腹立った。あれ何がしたかったんだろっねえ。嫌がらせ？』

『……………』

『お前もあいつからあの嫌がらせされたりするわけ？ やっぱ殺してこようかな』

『……………』

『なんかお前さあ、最近人の真似しなくなったね……………って、なんでいきなり殴ってくんだよ！ ちょっと何。待ってって！ 意味わかんない！』

口は災いの元。

そして実はこっそり気付いていた朔月。

【エコーにお仕置き】

「こらエコー、ちょっとこっち来なさい。そうこっちこっち。

いい？ もう『ブツ殺す』なんて言葉、使ったらだめだよ」

『使ったらだめだよ』

「そうです！ 悪い言葉を使ったエコーにはお仕置きをします。えい、ぶた鼻の刑だ。どうだ参ったか〜ブヒブヒ〜」

『……………』

あ、あれ、怒っちゃったかな。

『ぶひぶひ』

参りました。

無表情なのに可愛かった、今の。くそ。

【ひとりごと1】

『おい、朔月の娘。ここにいるか?』

『はい居ますよ。何か御用ですか百々目鬼さん』

『一つ聞きたい』

『なんですか』

『「ちきんらーめん」とは、何だ?』

『な……なぜソレを!?!』

『お前が以前、社の中でぶつぶつ言っていた。「ああ今すっげえちきんらーめんが食べたい」と』

『ぐああああ!! やっぱり私のひとり言盗み聞きしてたんですね!?!』

『私は盗みの妖だからな。それで、ちきんらーめんとは一体何だ』

『なについて言われても。そうですね……すぐおいしくて、すごくおいしい食べ物ですよ』

『わからん』

『あ、なんだか急にお腹がすいてきました。ちょっとお供物頂きに行ってきます』

『ちきんらーめん……か』

【ひとりごと2】

『そうか。分かった』

『何がです?』

『いたのか朔月の娘。本当に気配が無いな、お前は』

『えーっと魔力の気配ってやつですか。何度も言いますが、そんなファンタジーなもの持ってませんからね私』

『ふぁんたじい? それよりも、ちきんらーめんのことだが』

「まだ考えてたんですか!？」

『直ぐ美味。かつ、大層美味。ならば答えはアレしかあるまい』

「え!？ あるんですかチキンラーメン!？ (わくわく)」

『ああ。抜きたての猪の心臓がそれだろう。まだ少し動いているとなお良いな。あれは美味い。取ってきてやろうか?』

「いいえお気遣いなく」

『そうか。……? お前泣いてないか』

「全然泣いてませんよ!!」

### 【牛鬼がゆく】

『おい、俺の酒が飲めねえってのかあ?』

? 朔月の場合

「いや、あの日本の法律ではですね、未成年の飲酒は……ひっ、すみません飲みます!!」

(しかし山の主が現れ、渋々引き下がる牛鬼)

? エコーの場合

『……………』 (ふい、と無表情で顔をそむける)

? 天邪鬼の場合

『飲めねえってのかあ、だって。ぷ、あはは。死ぬ?』 (戦闘開始)

? 百々目鬼の場合

『あるだけ持ってこい』 (気怠げに飲みつつ、かなりの酒豪っぷり。つまらん)

? 女郎蜘蛛の場合

『うふふふ。……わっちは酒より飲みたいものがあるんすえ?』

(身の危険を感じとっさに攻撃。戦闘開始)

? 鴉天狗の場合

『要らぬ』(溜め息をついて飛び去る。つまらん)

? 猫又の場合

『あきまへん。ほんまにのんべえどすから牛はんは。朝から晩まで酒酒で……聞いてはりますのん?』

(説教に飽き、離脱)

結論：絡むなら朔月。

### 【エコーの視線 第5話7おまけ】

じいーーーー。

「……っ」

「ん? どうしたのライヒ」

「あの、その物の怪がさつきから……いえ、なんでもないです」

「エコーがどうかした?」

「いえあの目が……」

「目? あ、ライヒちよっと目が腫れちゃったね。泣いたらすぐに冷やした方がいいよ。布かなんか川で濡らしてこようか」

「……その、僕の目じゃなくて。でもあの、ありがとっごいいます……」

「ああ、っしっしっすっすっすっす駄目だよ。ますます腫れるから。エコー」



「？ どうしたの」

『濡らしてこようか』

「お、川に行つてきてくれるの？ ありがとう、優しいねえエコーは。よーしよしよし」

『……………』

「（う、見てる……………すごく凝視してる……………）」

「（実はすごくライヒと仲良くしたいのかなエコー。おお、それはなんか和むなあ）」

さて、その視線の意味は。

【ちょっとやってみただけ】

今日の天気は土砂降り。

なんでも、満月の後には月呼雨という激しい雨が降るらしい。

自由奔放な妖怪たちも昼間はそれぞれのねぐらに戻るらしく、現在神社の中は閑散としている。参拝者はもちろん一人も来ない。すっかり手持ち無沙汰になった私は、エコーに口笛を教えることにした。

「そうそう、唇と唇の間を開け過ぎないで。うん、ちゃんと音が出てきたね。上手だよエコー」

『上手だよエコー』

「あははは、うん上手上手」

びいと細く口笛が鳴るたびに、エコーの瞬きがぱちぱちと心なしか増えている。

あーこれ喜んでるな絶対、分かりやすいなあ。無表情だけど。

と、ほのぼのしていたら

『はっ、下らない。ほんと馬鹿馬鹿しくって見てらんないよ。音の芸を仕込んでそんなに楽しい？』

なぜかねぐらに戻ってこない天邪鬼がそう言ってきた。

ふむ。

「うん、むちゃくちゃ楽しい！」

『死にたくなかったら今すぐ黙れよ、小娘』

正直に答えたら何故かキレられてしまった。怖い。怒りの沸点低くないかこの子。

そんな中、エコーはひたすらマイペースにぴいぴい口笛を吹いている。ふんと不機嫌そうに鼻を鳴らした天邪鬼は、狐のお面をぐいと被り神社の隅にごろりと横になった。不貞寝ですか。

ざあざあと、雨粒が神社の屋根を打つ。

単調な雨の音にだんだん眠くなってきた。

ぴい、ぴい。ぴい。ぴゅー。

……エコーも頑張るなあ。

ぴい。

私はがばつと跳ね起きた。

「ちよ、今………！……！」

『黙れ。殺すぞ』

雨はまだまだ、止まなさそうだ。

## web拍手小話まとめ二

### 【第6話1その後おまけ】

「御大」

「如何した。鴉の」

「もしや娘を腕に抱えておいでで」

「是。はて、朔月は見えておらぬだろう。何故分かる」

「先刻から幽谷響がこちらを見ております」

「笑。あれは主に関しては恐ろしく聡いな」

「御意」

【なんでかなあ？】

「クラトさん！ 昨日またお腹出して寝てましたよね！？ もう、風邪引いても知りませんよ！」

「あ？ あー悪い悪い。布団かけてくれたんだろ。ありがとな」

「な、ち、ちが、違います！ あたしはただ直視に耐えられなかっただけで……」

「腹筋をもつとちゃんと割りてえんだけどな。鍛えが足りないかぺら。」

「み、みみつ、見せないでください！」

「んだよ。そんなに顔背けなくてもいいだろうが。あ、腕の筋肉は」「脱がないでくださいー!!」

「触るか？」

「触りません!」

「遠慮すんな」

「してませ……っ、ち、近づかないでください!」

「ちっ。なんでだようるせえなあ。おいニーナ、ちょっと待って」

クラト兄ちゃんはカンナに優しい。

おねえちゃんにも優しい。

でもね、時々ちょびっとだけ意地悪してるみたい。

なんでかなあ？

### 【山童さん】

妖怪達と話すのはなかなか難しい。

中でも特に難しいのが、山童さんだと思う。

「おにぎりそんなに美味しいですか、山童さん」  
「ばくばくばく。」

「ほっぺたにご飯粒付いてますよ、山童さん」  
「ばくばく、ひょい、ばくばくばく。」

「腹が減ってはいくさは出来ぬですか、山童さん」  
「もくもく、ごくん、ばくばくばく。」

「でも平和が一番ですよね、山童さん」  
「むしゃむしゃ、もくもく。」

おかつぱ頭で小さな体。指の間につつすら水かき。  
けれどもその胃袋の底は窺い知れぬ。

今日も今日とて、山童さんの前で私の独り言が空しく響くのであ

った。

【続・山童さん】

百々目鬼さんに聞いてみた。

「山童さんはどうしていつもお腹が減っているんですか」

『おや、もう山童がやって来る時期だったか』

「え、何ですかその今年も渡り鳥がやってきたかー的な台詞は。と  
いうか結構前からいましたよ、山童さん」

『ああお前は知らないのか。奴は平生、河に住まう物の怪だ。秋頃  
になると山にやって来る』

「そうなんですか。……ん？ あれ、ひよつとして」  
『どうした』

「山にいる時は山童さんなんですよね」

『そっだ』

「ええと、も、もしかして河にいる時の山童さんは……」  
『河童だな』

だから水かきがあったのか、山童さん!!

二つの顔を持つ妖怪、山童さん。河の食べ物には飽きちゃったの  
かな。

今度会ったら、泳ぎは得意ですかと聞いてみようっと。

読み方：やまわろさん

【秋深き、隣は何を】

真っ赤な夕焼けが朔月山を燃やし尽くそうとするように照り輝く。その綺麗な火の粉を浴びたから、紅葉は赤くなつたのかもしれない。

「はいライヒ、お土産」

朔月山の石段を息せき切つて駆け上がる少年を呼びとめ、隣に座らせて一緒に夕焼け空を見上げる。

ぼけーと二人で赤い夕日を眺めた後、そういえばとこそごと袂を探った。

昼間に見つけたものを取り出して、ライヒの手のひらにそつと乗せる。

「……僕に？」

「うん。あの大きな窓木の葉っぱだよ。見事な赤だつたからライヒにあげようと思って」

ぼかんとしたように紅葉を手に乗せていた美貌の少年が、はつと顔を上げた。

「あ、あのもつ」

「紅葉、好きじゃなかった？」

「違います好きです！ あ……。あの、その、違います、紅葉のことか」

いや違つのか、違わないのかはつきりしてくれ。

「その……ぼ、僕も、なんです。朔さまにと思って」

持って来たんですと掠れた声で呟くと、ライヒは懐から小ぶりの紅葉を取り出した。

ああ、私たち同じことを考えてたんだね。

おずおずと差し出された葉を丁寧に摘んで、私はそれを左右に振つて見せた。

「ありがとう。綺麗な色だね」

「それが、あの、お会いした時の袴の色と一番似ていたから……」  
「覚えてくれてたんだ。うわー、嬉しいなあ」

「この子は優しい子だ。」

じんわりと温かな気持ち私の胸に広がってゆく。

「僕もありがとうございます。これ、大切にします」

「そんなに紅葉が好きだったんなら、また取ってきてあげるよ」

「いえ。……この紅葉が、いいんです」

うーむ、欲がないなあ。

私だったらもつといっぱい集めて焼き芋とかしたいな。黄金色のほくほく芋か。じゅるり。

と、そこに。

『朔さま』

「あ、エコー。あれ、よく私の場所が分かったねえ」

突然現れるの妖怪にも慣れた私が機嫌良くそう言えば、山彦少年はちらりとライヒを見やった。

とたんにびくりと体を揺らすライヒ。なんだかもう恒例だなこれ。

「なるほど、ライヒが座っていたから分かったんだね。あ、そうだ

エコーも手出して」

再び袂をこそそとまさぐる。

「はい。エコーにもおひとつどうぞ」

『おひとつ』

ちらり。びくり。

「え、あの、朔さま……この物の怪にも拾って来られたのですか？」

「うん。そっだよねー」



あとは山の主と猫又と百々目鬼さんと、まあエトセトラ。  
とりあえず真っ赤で綺麗な紅葉を拾って、袂の中にしこたま詰め  
て来たのだ。

うーん、秋のおすそわけなんて我ながら風流だな。

まあ天邪鬼は絶対受け取ってくれないだろうけど。むしろ私が真  
っ赤に染まりそうで怖い。

「そう、ですか」

『朔さま。ありがとう』

\*\*\*

秋深き、隣は何をしても  
そつと落ちゆく一葉をきみに

### 【こぼれ話？ 謎かけ編】

本編第5話「嘘つき少年の本当の嘘4」で猫又が歌っていた唄。

息し辛いと苦しいと

憂き世別れ彼 ああ貴方

巢喰う殺しにや 醒まし酔い合っ

浅まし唾うわ 狂狂と

死ぬ気で喘げば 夜も終すから

生き辛いと狂い問う

気弱枯れ枯れ ああ貴方  
救う頃にや 彷徨い逢う朝  
廻らう輪 くるくると  
今際のきわにや 世に絶<sup>すが</sup>る

というものですが。これ、実は少しだけ言葉遊びをしています。  
上と下の5行の歌詞を見比べてみてください。  
何か一つ、気がつきませんか。  
ばればれだと思えますが、ヒントは上の歌詞の5行目にあります。

答えは出ましたか？

それではよろしければ、お手を拝借！

【こぼれ話？ 解答編】

はい、今考えたので正解です。  
というわけで答えは「死ぬ気」、「つまり」、「し」抜き「でした！」

「いきじづらいとくるしいと うきよわかれかれ ああ貴方」  
の部分の「し」を抜くと、  
「いきづらいとくるいとう きよわかれかれ ああ貴方」となり、

「すくじころしにや さましよいあう あさましわらうわ くるく  
ると」が

「すくじころしにや さまよいあうあさ まわらうわ くるくると」  
となるわけです。

一体誰が得するんだこんなこぼれ話。ヒトエビトです。  
拍手御礼のネタをかせごうだなんてちっとも思っていないせん。

【物の怪一面相】

笑うこともなければ、怒ることもない。  
泣くこともなければ、驚くこともない。  
君はいつも何を考えているのだろう？

「うーんわからんなあ……」  
ぼふんと後ろに倒れ、空を見上げながらぼそつと呟く。  
するとぐっすり眠っていると思っていた山の主がむくりと顔を上げた。

『訝。何がだ朔月』  
ぎゃー！ 起きてなすつたあああ！  
わたわたと尻尾から起き上がろうとしたら、袴の裾を思い切り踏んづけてぼふんと再び後ろへダイブ。

『呆。何をしている』  
「ふが、すみません」  
太陽の匂いがある尻尾に埋もれながら、ついでにその毛触りを堪能する。

『良い。して何が分からぬのだ』  
「ええっと、エコーの表情というか感情です」  
『ほう』

「今喜んでるかなーとか、なんとなく雰囲気は分かるんですけど、大抵無表情だからいまいち正確さに欠けると言いますか……」

あれはもう、ポーカーフェイスってレベルじゃない。  
ほんのちよっぴりでもいいからもう少し喜怒哀楽を表現してくれ  
たらなあ。

『異。あれは以前よりも感情豊かになったぞ。否。感情そのものを  
得たと言っべきか』

「ええ！？ アレが！？ アレで！？」

『是』

ウソだ！

だって眉を寄せた顔すら見たことないのに。ど、どういふことだ。  
いや待てよ、私には見せてくれないだけ……とか。

まさか遠回しに拒否されてるのか？ そっぴや前に「友達じゃな  
い」って言われたっけ。

おおつと一人で悶々としていたら、本人がひよっこり現れた。

噂をすれば何とやらだ。

……しかしエコー、いつもながらどうやって私の居場所が分かる  
んだらうなあ。謎だ。

『朔さま』

うん。呼んでくれるのは嬉しいけれども、やはり鉄壁の無表情だ  
った。くそ、無念だ。

はいはいここですよーと返事をしようとしたら、いきなりぼすっ  
と頭を叩かれた。

私は声もなく毛の海に沈んだ。本日三度目のダイブだ。

『否。此処に朔月は居らぬぞ』

ええ！？ な、何言っではりますの山の主！？ その素知らぬ顔  
はなんだ！

むぐ、尻尾が首に……こ、絞殺する気が。

『居らぬぞ』

淡々と繰り返すエコーの顔を見て、山の主がゆったりと低く笑う。  
『さて、知らんな。当。忌子に会いに行ったのではないか』

『行ったのではないか』

『興。ぬしも其の様な顔ができるのだな、幽谷響よ』

『……』

『くつくつく、焦りは何も生まぬぞ』

『朔さま』

『瞳。虚ろの木霊は何処へ行ったのだ。ぬしも随分解り易くなったものよ』

いやいやいやいや。

全然分らんわ。

なんで普通にエコーの表情読めてるんですか、山の主。あれですか。やっぱり心の目ですか。

なんだろうこの悔しさ。私エコーの名付け親なのに。

「異議有り！ 何ですか納得できません！ 私にもそのスキル分けて下さいお願いしますっ！！」

がばつと尻尾の拘束を振り切り、私は握りこぶしで叫んだ。鷹揚とした動作で尻尾が波打つ。

『訝。すぎるとは何だ朔月』

別に、羨ましくなんかないぞ。

私だってエコーの気持ち分かる時はある。

ほら、その証拠に

『……朔さま』

今、エコーはちよっぴり喜んでる。

そっだよ。

私はここにいますよ。

笑うこともなければ、怒ることもない。  
泣くこともなければ、驚くこともない。  
でもさ、エコー。

心が通じ合えるのなら、そんなの関係ないかもしれないね。

【物の怪一面相 おまけ】

『なんかさあ、気のせい？ さつきからすつごくウザったい視線感  
じるんだけど』

「うーん。エコーが思いつきり顔顰めたらこんな表情になるのか。  
なるほどなるほど」

『はあ？ 何言ってるの、聞けよ。殺されたいわけ？』

「おお、エコーが冷笑を浮かべたらこんな感じに。ふむふむ……」

『ちっ、糞が。木の上から見てるだろお前、叩き落とすよ？ それ  
とも手足へし折られたいの』

あーあ。

天邪鬼が笑顔になってくれたら、エコーの笑顔だって分かるの  
なあ。

### web拍手小話まとめ三

【もう風呂になんか行くもんか】

私は悩んでいた。

恐らくこの妙な世界に来て以来、悩んでいない日なんて一日もないだろうが、とにかく悩んでいた。

何についてかという答えはシンプル、風呂である。今までは山の西側にある滝つぼへ足を運び、修行僧の如く行水をしていただけ、これがまあ季節柄というか大分厳しくなってきたのだ。

上流の水は異常に冷たかった。しびれるほど冷たかった。しびれた。

……温泉に入りたい。

湯けむり立ち昇るあたたかい露天風呂に肩まで浸かり、朔月山の雄大な景色を楽しみながら美味しいものに舌鼓を打ちたい。今なら美しい紅葉を一人で贅沢に眺められます。

ああだめだ。考えるんじゃない。温泉に入りたくて力が出ない。

『おやおや、何の唸り声でありんしょう。もしやわっちの朔月でありんすかえ』

女郎蜘蛛が現れた！

？戦う？逃げる？挨拶する？悩みを打ち明ける

「さ、さよつならー！」

とりあえず？でいいつ。

『待ちなんし』

だが回りこまれた！ 無難に？でいくしかないか。

「ええつと……こんにちは、女郎蜘蛛さん」

『相変わらずまこと愛らしい声でありんす』

「は、はあ」

『ところで最近はどうして来てくりんせんのか？ わっちはいつでも待っていていんす』

一体なんの話だろう。吉原通いなんてあつしはしてませんぜ！

『いつなる時も、ぬしのあられもない姿を想像すると愉しくてなりんせん』

ほ、ほんとに何の話をしているんだこの人！

『清げなる夜明けの齋戒沐浴。水は軟らかなる応えを残し、乱るる水面に夢も現も見せじとなれば忍ぶ花はいずこかと』

ま、まさか。

「じよ、女郎蜘蛛さん……」

『なんでありんしょう』

「お、お住まいはどちらでしょうが」

妖艶な花魁姿の妖怪がうっとり微笑んだ。

『わっちは、朔月山の滝主でありんす』

ぎゃああ————！！！！

行かない！！

もう絶対に、滝になんか行くもんか！！



後日談

「うう……なんで教えてくれなかったんですか、百々目鬼さん」  
『何を言っている。見えぬものを如何にして恥じるといふのだ』  
「これは気持ちの問題なんですよ！ とんだ羞恥プレイをしてたんですよ私！」  
『近くで叫ぶな。鬱陶しい』  
「うわあああ恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい」  
『難儀な奴だ』

【妖怪飯握り】

天邪鬼の性格は、心底捻じ曲がっていると思う。  
人の不幸を指差して嘲笑い、悲しみには手を打って喜び、怒りにはさらなる怒りを煽って面白がる。人の口調を真似て馬鹿にするし、残酷なことを平気で口にする。ありとあらゆるものに嘲りと罵声を浴びせなければ気がすまないのではないかと思うほど、全てに対して非好意的な態度しか取らない。

が、しかし。

『御大、お早う御座います！』  
『雑。五月蠅いぞ天の。朔月がまだ寝ておる故騒ぐな』  
『承知しました。ではそのまま永の眠りにつかせてやりますね』  
「うおおいちよつと待て！ 起きた、起きたからやめて！」  
『……ちっ、ああ面倒くさいなあ。目玉抉って口に突っ込んでやるよ小娘、それとも一枚ずつ爪を剥いでやろうか？』

「全部断るっ」

『天の、朔月で遊ぶな』

『はい御大！ 朝餉は如何がされますかっ』

『無。いらぬ。朔月に何ぞ支度してやれ』

『あはは馬糞でも食わしてやるうか小娘、泣きながら食ってよ。そして死ぬ』

「断る！！ 全っ力で断る！」

『天の』

『はい御大、僕に何なりとご用命下さい！』

が、しかし。

山の主に対してだけは全身全霊で尻尾を振る。

子どもらしい笑顔と殺気だった冷笑が、よくもまあ鮮やかに切り替わるものだ。

朝っぱらから死ぬとか言われるのも慣れてきた自分がいる。

いやだなあ。怖いことばかり言う天邪鬼なんて私も嫌いだよ。

やっと神社から天邪鬼が出て行った後、山の主が尻尾を揺らして唸った。

『慮。朔月、あ奴はああ云う妖だ。気にせずとも良い』

「イイエ？ 別に気にしてませんよ、あんなの」

『笑。あれなりにお前を気に入っておる様だな』

「えええ！？ どの、どの辺りで、そう思われるんですか！」

『さてな』

しばらく山の主と話していると、がたりと神社の戸が開いて妖怪特製握り飯を持ったエコーがすたすたと入ってきた。山の主を思い切りスルーしてるけど、挨拶くらいしようよエコー！。

ずい、と握り飯を差し出してくる。

え、朝ご飯もって来てくれたのかエコー！ さすが、優しい！

でも差し出してる方向違うよ！

「おはようエコー。わざわざ持って来てくれたんだね、ありがとう」  
少年の灰色の目がぱちりと瞬く。無表情のまま首を横に振った。

『わざわざ。違う』

うん？ 違うの？

と、急に山の主がくつくつと愉快そうに笑いだした。なんなんですか。

エコーがちらりと外を見て、それから握り飯を見つめて、思案するようにはちりと再び睫毛を瞬かせた。えーつと……まあいいや。いただきます。

握り飯は若干パサついてたけど、美味しかった。

『愉。馬糞でなくて良かったな、朔月』

「いやもう本当ですよー。ありがとうねエコー、ごちそうさま」  
『くつくつく』

一体何が可笑しいんだろう。

でも朝ご飯食べたら、天邪鬼にムカついていたのが治ったな。  
よし、今日も山神業がんばりますかー。

\* \*

後日談

『ふっ』

「どうしたんですか、百々目鬼さん」

『いや、先日珍しいものを見た』

「え！？ 必殺、鳥の目視点ですね！ 何を見たんですか？」

『悪鬼の如き表情で飯を握る物の怪だな』

「それはまさか……よ、妖怪飯握り！？」

『何だそれは』

【将来は死人が出ます。】

「あのさエコー、私常々思うんだけどね」

『思うんだけどね』

「ライヒってむちゃくちゃ綺麗な顔してるよね」

『してるよね』

「あれって将来、絶対危ないと思う。いや今もかなり危ないけど」

『あぶない』

「うん。あれはリアルに傾国の美貌になるだろうね。ライヒを巡って戦争が起こってもおかしくないよ。すれ違っただけで死人が出るかも……死因は過剰な美貌を直視したことによる心臓停止で」

『朔さま。あぶない』

「うん？ いや私は危なくないよ。むしろ悲しいくらい平和だよ」

『平和。綺麗』

「そうだね、平和が一番だね。私もそう思うよ」

『朔さま』

『なあに』

『エコー。一番』

「うーんと（な、何がだろう）」

『一番』

「う、うん！ そうだね！ 一番一番！」

『死人』

『死人！？』

『ありがとう』

「ど、どういたしまして……？（だめだ全然わからん）」

\*\*\*

### 後日談

「ライヒ、変な人に声をかけられたらすぐに逃げるんだよ」  
「え？ あの、は、はい……」  
「じゃないと戦争が起こるからね！」  
「ええ！？ えっと一体何を……」  
「もっと危機感もって！ ね！」  
「は、はい。朔さまがそうおっしゃるなら……」  
「ああもつ心配だなあ」  
「……すみません」  
「くっ、このままでは死人が！」  
「死人！？（な、何を仰っているんだろう）」

### 【小さな獣と大きなぬくもり】

寒いなあと思って目を覚ますと、神社の中に数匹の小さな獣がいた。

赤茶色の丸っこい子狐だ。

ころころと神社の中を縦横無尽に駆け回っている。

『追』

『待。疲』

『休？』

『是、是』

『眠……』

『遊？』

『遊』

『遊!』  
『走!』

勢い余ったのか、そのうちの一匹がぼすんと私にぶつかってきた。ころんと床に転がる子狐。円らな瞳が「あれっ」というふうに瞬き、きよとんとした表情を浮かべた。もぞりと起き上がると、座っている私の膝にふんふんと鼻を寄せてくる。

恐る恐るといった感じで前足を乗せ、ふわふわの二本の尻尾が慎重に揺れ動いた。

くんと何かを確認するように小さな鼻がうごめく。

それでも納得いかなかったのか、最後に『……奇』と小さく鳴いた。

あわわわ。

可愛い。可愛すぎる！　なんかもう可愛すぎて眩暈がしてきた。

おかしいな、私は小型犬より大型犬派だったのに……。

もう辛抱たまらないので、膝の上を占拠している不屈きな生き物をひよいと持ち上げてみた。

うわ、ふわっふわ！　軽い！　やわらかい！　お前は羽毛クツシヨンか！

他の奴と比べてちょっと耳がギザつとしてるところがチャームポイントだな。

よし、お前なんかこうして、こうして、こうしてやる！

抱き締めて、頭を撫でて、頬ずりの刑に処した。ああ、癒されるなあ。

小さな顔を覗き込んで私はにっこり笑った。

「こんにちは」

『驚』

「ごめん、びっくりさせたねえ」

『不。見』

「うーんかわいい。きみの名前はなんて言つの？」

『…………』

「あ、ちなみに私は朔月と申します。この山と同じ名前だよ」

『朔？』

「うん、そう。カツコ飯だけど」

それにしてもこの子狐、山の主のミニバージョンというか、尻尾の毛の感触や見た目がそっくりだ。もしや……山の主の子どもか？  
けど、そもそも山の主って雄雌どっちだったっけ。お母さんだったらなんか笑える。

ふふふと笑っていると、遠巻きにこちらを見ていた子狐集団がようやく近づいてきた。団子みたいにぎっしりと固まってそろそろにじり寄ってくる。そんなにあからさまに警戒しなくてもなあとがっくりしていると、腕の中の耳ギザが、「なんかコレ大丈夫っぽいよー」と呼びかけるように鳴いた。

それを聞いた子狐たちが、ころころころと一気に駆け寄ってくる。  
おお、でかした耳ギザっ！

なになにこれどーなってるの、とばかりに子狐たちが私にまとわり付いてくる。背中に飛び乗ってきたり、腕に甘噛みしてきたり、ぐるぐると体の周りを回って鼻先を擦り付けてきたり、やりたい放題。

なにこの幸せ空間は……あ、痛い、腕痛い、でも幸せ。

『呆。何をしておる。其れはお前達の玩具では無い』

『あらあら、えらいおもしろい事になってはるなあ。朔月はん』

『ぶっ！ がっはっはっは！！ なんじゃありやア！？』

神社の戸が開いて、巨大狐と猫又と牛鬼が外から帰ってきた。  
いよいよアニマル空間になってきたな、ここ。

山の主がのしのしと私のもとへやって来ると、尻尾の一本で実に

呆気なく子狐達を蹴散らしてしまわれた。

くっ、束の間の天国だった。残ったのは腕に抱いていた耳ギザのみである。

「お、お願いです、どうかこの子だけは……！」

「妨。何を言っておるのだ朔月。そも、そ奴らに此処への立ち入りは諾しておらぬ」

「ええ！　なんですか、こんなに可愛いのに」

「朔月はん、そのちっさい子おは赤鬼狐ゆうてなあ。物の怪より獣の方に近い小物なんどすえ。せやさかい、御大の社に転がしとくのはよおへんのどす」

「オラッ、散った散ったア！　踏み潰されたくなけりや外できのこでも取って来いや、チビ共」

「きのこで、そら牛鬼はんが今食べたいだけでっしやる」

「いいから酒だ酒！　今宵の宴をおっぱじめんぞ、オイ盃持って来い！」

「あきまへん、御大の前でみっともないどす。それにまだ夕刻や」  
「いいじゃねエか、どうせ人間は来ねエしよお」

ぎゃいぎゃいと言い合いを始める妖怪二匹を尻目に、山の主が私の隣でくあ、と大あくびをした。至近距離の鋭い牙にぎよっとした瞬間、ギザ耳が私の腕からぴよっと出て行ってしまふ。

うわーん山の主め、絶対今のおくびわざとだろちくしよー！

ふわふわの尻尾が神社からいそいそと出て行くのを涙目で見つめていると、山の主が低く笑った。

「あれが気に入ったか、朔月」

「はい……。だってすごく可愛いじゃないですか。山の主にそっくりなんですわ、あの赤鬼狐って」

「是。はて、初めに言わなんだか。我も元はあれだ」

「えええええ！？」

全然覚えてない！



いや、確かにそんなことを言ってたようなそうでないような……。『明。只の獣ならば赤狐だが、魔力が高まれば赤鬼狐と成り果てる』そんな狐の進化系知らんがな。

ふと疑問が浮かび、私は山の主を振り返った。

巨大な狐の姿をした山の神様。

「どうして、そんなふうになったんですか？」

聞きながらそつと手を伸ばして顔に触れてみた。大きな鼻、大きな口。

綺麗で優しくて恐ろしい、妖怪たちの主。

すつ、と山の主の瞼が静かに下りる。

沈黙が横たわった。

それはまるで、記憶の底にある何かを思い出しているかのようだった。

結局、私が山の主の答えを聞くことはなかった。

いつものごとく妖怪たちがぞろぞろと神社にやって来て、どんちやん騒ぎを始めたからだ。

ちっ、空気を読みやがれってんだべらぼつめ。というかココって格上の妖怪じゃないと入れないらしいけど、だったら私ここにいてもいいのかと今更ながら心配になってきた。色々あれだけ一応人間だし。そんでもって幹部の妖怪？ じゃないと山の主には近寄ること駄目らしい。え、本当にいいのかな、私……。毎回、至近距離にいるんだけれど。

でもその晩、私は妖怪達の宴が終わるまでずっと山の主にくっついてた。

なぜなら隙間風が寒かったから。

他の妖怪からちよっかいを出されないから。

天邪鬼の殺気からこっそり隠れられるから。

なぜなら 山の主が、なんだか少しだけ、寂しい目をしていたから。

だから側に寄り添っていようと思ったんだ。

「あの、私、山の主が今のお姿で嬉しいです。とても温かくてぽかぽかします」

なんていったって大型犬派ですから、私。

あなたがいるから寒くないよと伝えたくて、私は大きな狐を抱きしめた。

無言で尻尾が伸びてきて、ちっぽけな私をすっぽりと包みこんでくれる。

ああ、きつと寂しかったのは私の方だ。

ねえ。

誰にも知られず側にいるから。

どうか夜が明けるまで、ぬくもりをください。

そうすれば、もう寒いなんて思わないよ。

\*\*\*

後日談

「あ、そういえば山の主の性別ってどっちなんですか？ 百々目鬼さん」

『何を言っているんだお前は。見れば分かるだろう』

「いやわかりませんから」

『きのこ食うか?』

「いただきます!!!」

うおお秋の味覚だー！。

もぐもぐもぐ。

『おお、きのこが消えていく。面妖な』

……えーと、なんの話してたっけ。

## Web拍手小話まとめ四

【The Monster's Smile!】

無表情少年ことエコーの笑顔が見てみたい。

何かこう、現実的で無理がなくてお手軽な方法はないものだろうか。

私は一計を案じることにした。

「ごほん、折り入ってお頼みしたいことがあるのですが」

『問。申してみよ』

「ええつと私が山の主の隣に居るのをですね、天邪鬼に黙っていて欲しいんです」

『了。構わぬが。何だ朔月、悪巧みか』

「はい！」

『笑。良かろう、素知らぬ顔をすれば良いのだな』

「はい、お願いします。ありがとうございます！」

よーしよしよし、これで根回しはばっちりだ。あとは獲物がかかるのをじっと待つのみよ。

私は敏腕スパイのごとく山の主の巨体にさつとくつつき、息を殺した。

が、しかしふわふわと手触りの良い毛が頬をくすぐってくる。…くっそ、笑っちゃいけないときに限ってなぜか笑いたくなる。この現象どうにかしてよもう。あ、くしゃみしたい！

私が必死に己と闘っていると、間もなくして神社の戸がガラリと開いた。き、来た！

『御大!』

反射的に山の主の毛をぎゅっと握りしめてしまったが、山の主は先ほどの宣言通り私を完璧にスルーしている。スルー検定上級者の称号を密かに捧げておきましょう。

『応。天のか』

入ってきたのは私の狙い通り、天邪鬼。くくく、飛んで火に入る天邪鬼。

……が。

く、くつそおおお！　なんで今日に限って狐の面を装着しているんだー！

取れ！　外せ！　とつと顔を見せる！　と邪悪な念を無言で送っている、それまで山の主と嬉しそうに話をしていた天邪鬼がふと小首を傾げた。

あ、今の動きエコーにすごく似てる。

『御大、あれは此処に居ないのですか』

『冗。さてな』

いやいやいや！　そこは否定してください山の主！　今絶対に笑っただろう！

四本の大きな尻尾が機嫌良さそうにわさわさと揺れている。

この複雑な動き……さては二重の意味で楽しんでるな、山の主。天邪鬼にしらつと嘘を付くことと、私をじわじわ焦らせることのダブル方向攻撃ですか。スルー検定上級者の称号は速やかに剥奪しようと思う。

『ふうん。あれが居ないと清々しますね、御大。このまま帰ってこないと良いですね!』

別にあれ呼ばわりなんか気にしない。

目の前でそんな陰口言われても、別になんとも思わない。

傷ついたりしていない。へっちらだ。

『興。左様か』

『はい！ 僕はあれが大嫌いです。存在そのものが本当に気に入りません。死んでしまえばいいのに』

へ、へっちらら……だよ。うん。ほんと。というかさ、今何気に舌打ちしたよね。

『愉。其れは其れは』

獣スマイル浮かべないでください、山の主。牙が剥き出しで怖いです。

その時ふと天邪鬼が狐面を横にずらした。

私は山の主の前足辺りに立っているため、露になった天邪鬼の顔が真正面に見ることが出来る。

よ、よし。これで

『だからさあ、いい加減に御大の御身体から離れるよ。小娘』

にっこり。

「うお！？ え、ななななんで分かったの!？」

『黙れ叫ぶな。耳障りなんだよその声。あんたが居ると僕さあ、無性に苛々するんだよね。今すぐ八つ裂きにしてやるうか』

『断る!』

というか、私が居ようが居まいが常時苛々してるだろうが！ 力ルシウム取れよ！

『笑。無念だったようだな朔月』

「……山の主、最初から気付いていた事に気付いていたんですね」  
『やて』

「しらばっくれても無駄ですから!」

『おい。それ以上御大に向かって無礼な口を叩いてみるよ小娘』

……殺すぞ』

ひっ、マジ切れしたああ！

凍りつくような殺気に慌てふためき、私は神社から弾丸のごとく飛び出した。逃げるが勝ちだ！

するとドシーンと外に居た何かにモロにぶち当たってしまった。

ぎゃっ、体が吹っ飛ぶ……ばない？

ふわりと甘く良い香りが漂い、頭の中が一瞬くらりとしてしまう。

あ、いかん。この香りは

『おやおや、常ならずせつかちでありんすねえ。わっちがそんなに恋しかったでありんすかえ？ 朔月や』

ち、違え！ おわ、ちよっと、背中をいやらしい手付きで撫でるな！！

私は飛んで火に入るならぬ、飛んで女郎蜘蛛に捕まった。

「離してくださいっ」

『肌触りを追って楽し、瑞々しく柔かな輪郭を味わう興よ、今宵は新奇なる嬉戯の帳を開きんしょう』

「そんなわけ分からんもの勝手に開かないでください！」

なんで肩を無駄に肌蹴させているんだ。風邪引くからとつとしまいなさい！

襲い掛かってくる女郎蜘蛛を全力で押し返していると、神社の中から天邪鬼の嘲笑が聞こえてきた。

『蜘蛛女、良いよ今のあんた。滑稽な虫けらがまるで一匹で盛ってるみたいでさあ。あっははは傑作！ もっとやってよ、小娘が嫌がつてて小気味いいからさ。でも五月蠅いからそいつの喉を潰したくなってくるねえ』

『わっちは巢に掛かった蝶を愛でずにはおれぬだけ。おねだりしても小僧っこの相手はしてあげんせんえ？』

『……は？ 死にたいのお前』

一方からは猛烈に嫌われ、もう一方からは意味不明なほど好かれている。

とりあえず精神を異常に削られるという点においてはどちらも同じだ。

妖怪の相手って何でこんなにしんどいんですか。もう出て行つていいですか、この山。

そのまま天邪鬼と女郎蜘蛛が妖怪バトルを開始しだした。なんでこんな展開になったんだ。

私はただエコーの笑顔が見たかっただけなのに。

?天邪鬼が山の主に笑いかける。?それをこっそりと正面から眺める。?エコーの顔に変換する。の、簡単な3ステップ計画だったのに。一応、「にっこり」満面の笑顔は見られたけれど、見た瞬間に分かってしまった。

無理だ、天邪鬼の顔はどう見ても天邪鬼だ。エコーに変換することとはできん。姿形がどれだけ同じでも、私にとってあの二人はきっぱりと別人なのだ今回よく分かった。

ズドーンとかドゴーンという少年漫画的な効果音がつきそうなバトルが続いている。

私は無言のまま神社の中にとぼとぼ歩いていった。

『愉。ぬしが絡むと山が愉快だな、朔月』

「私、たのしくないです」

ぼふんと山の主の尻尾の中に倒れこんだ。

なんかもう疲れた。

くくくと意地悪げな笑い声が尻尾の外から聞こえたが、あえて無視を決め込み不貞寝した。

たまには私だって山の主に反抗的になるときはあるんだ。ほっといてくれ。



\*\*\*

## 後日談

「ねえエコー。いーって言うってみてよ」

「いー」

「じゃ次、えーって言うって」

「えー」

「最後はいで」

「い」

「……いえーい」

「いえーい」

ああ、何やってるんだらう私。

## 【跳ね返る夕日】

ぜいぜいと胸を上下させながら、少年は山道を一人歩いていた。進んでは立ち止まり、立ち止まっては進む。

時々近くの木に背をもたせかけ、額に噴き出した玉の汗を手のひらでぺたぺたと拭った。

それは熱でうなされた時に出る汗とは違い、さらりとして心地よかった。

……本当に今日は、いつもより調子がいい。

少年は嬉しくなり、少しだけ笑った。その後すぐに、ぎゅっと眉根が寄る。

自分がこんな所にいることが祖母に知れたら、きっと心配をかけてしまうだろう。

でも、我慢できなかったのだ。

布団の上で目が覚めたとき、いつもより体が軽かった。

窓の外を見やれば、日の光が満ち溢れた世界が広がっていた。

大空はどこまでも青く爽やかで、山の緑は生命力に溢れて瑞々しかった。いつもは憎く思えるそれらが、何故か今日は目隠しを取ったかのように清々しく見えたのだ。

目を覚ました少年は足をもつれさせながら、よろけるように戸外へと出ていった。

彼の胸を占めていたのは喜びではなく、束の間の時間を掻き抱くような焦りであった。

病という鎖の束縛から突然解き放たれた体は、信じられないほど従順に動いた。

ゆえに少年は、朔月山を目指したのだ。

は、は、と細く息を切らす。

ことごと揺れる心臓の震えや熱く駆け巡る血潮、流れ落ちる汗の滴。

確かな命の存在が少年の体であり、一步一步がひどく愉快に感じた。

ふと耳を澄ませると、涼やかな水の音が聞こえてくる。

とたんに喉の渴きを覚えた少年は、よろめきながらそちらへと向かった。

膝を着き、山水を恐る恐る手にすくって飲むと、それはきんと冷たくて美味しかった。

無我夢中で喉を潤す。

何度飲んでも、やはりそれは美味しかった。

風が通り過ぎる。木の葉がざわめき、山の静けさが一段と増す。

少年は膝を抱えてうずくまった。

もしかしたら今日、自分は死ぬのかもしれない。

つめたくなつた自分を見れば祖母がかなしむ。

だから、きつと死に場所を探すためにここへ来たのだ。

それはとてもいい考えだと、少年は思った。

しばらくしてそつと膝から顔を上げると、隣に少年と同じくらいの年頃の少年が現れていた。

「おまえ、だれ……」

「おまえ、だれ」

灰色の目をした少年は川の水面を見つめながら、そっくりそのまま同じ言葉を吐いた。

よく見れば耳が尖っている。裸足の指の爪も鋭い。少年は灰色の少年を睨みすえた。

「おまえ物の怪だな、俺を食いにきたのか」

「おまえもののけだな、おれをくいにきたのか」

「ちがつ、俺がおまえを食うわけないだろ。真似するな」

「ちがつ、おれがおまえをくうわけないだろ。まねするな」

少年は少しうろたえた。

そして次の瞬間　　本当に突然だった　　猛烈な怒りを覚えた。  
それは理不尽な怒りだった。  
理不尽に対する怒りでもあった。

「俺は、もうすぐ死ぬんだ！」

世界が美しく見える日に。

「苦しいのはいやだ、もういやなんだ！　お前なんか分からない  
だろう、ずっとずっと生きるおまえに！　俺は、もう、死ぬんだっ」

水が冷たくて美味しい日に。

はあはあと肩を荒く揺らして、少年は激しく咳き込んだ。

大声を出したのは久しぶりで、喉がじくじくと痛んだ。

灰色の少年は石のような表情で、じっと動かない。ややあってか  
ら口を開いた。

『くるしいのはいやだ、もういやなんだ』

返ってくるのは、たった今投げつけた言葉。

『おまえなんかにわからないだろう、ずっとずっといきるおまえに』  
淡々と繰り返される声が、次々と胸に跳ね返ってくる。

唇を噛み締め、灰色の少年から目を逸らした。

『おれは、もう、死ぬんだ』

一言一句誤ることなく言い終えた灰色の少年は、再び口を閉じた。  
彼はただ、透き通った川の流れを飽くことなく見つめている。水  
面が日の光をちらちらと反射していた。

何を考えているのか、さっぱり分からない表情だった。

「……死にたくない。俺は、本当はまだ、死に、たくない……っ！」  
ふらつきながら立ち上がる。

震える声を絞り出した少年は、頬に流れていた涙をこしこしと拭いた。

灰色の少年は瞳を動かすことなく口を開いた。

『ほんとうはまだ、しにたくない』

静かに返ってきたのは、たった今投げつけた言葉だった。

返ってきたのは

偽らざる少年の心そのものだった。

\*

帰り道に見た夕日は赤かった。

「クラト！ どこ行ってたんだい！」

青褪めた顔で立っていた祖母は少年を見つけるや否や、小走りで駆け寄ってくる。

その痩せた腕に抱き寄せられたとき、幼い少年は声を上げて泣いた。

生きることのつらさと向き合うことが、とても難しかった。

帰り道に見た夕日は赤かった。

くるしいほど綺麗だった。

跳ね返ってくる、全ての苦しみが。  
跳ね返ってくる、全ての怒りが。  
痛みと悲しみと、そして少しの勇気と共に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0337x/>

---

山神少女+

2011年12月16日01時47分発行